



ローマの剣闘士

オルという発音から始まる名前
多分オールドスカオールドトス

父親が奴隷で剣闘士だった
彼が三歳のとき第5戦目で死んだ

剣闘士は普通3戦くらいでほとんどが死んでしまうから
5戦まで生き残ったのは随分強かったのだろう
それにわずかなあいだとはいえ家族を持てたのだから奴隷としてはまだましなほうだろう
父の記憶はほとんど何もない

父親が死んで2年後同じ奴隷だった母が病気で死んだ
まだ22歳だった
彼は病んでゆく母親のそばでただただ泣いていた
死骸は川に投げ捨てられた

母が死んでから主人のミリウスのひどい虐待が始まった

ミリウスは二人目の妻にも死なれてから精神がおかしくなった
妻が生きていたときにはまだしも抑制していた残虐性がしだいに常軌を逸した状態になり
手当たりしだいに奴隷たちに殴る蹴るの暴力をふるった
ひどい時には何の理由もなく手足をしばり川の中に投げ入れ
溺死する寸前まで笑いながら見ていた
逃亡する奴隷たちは平気でライオンに食わせた

それでも大物の貴族だったから誰も彼をいさめなかった
おりしも暴虐皇帝カリギュラの時代だったから
貴族たちはみなカリギュラに取り入るため
むしろ残虐さを誇りにしていた
そんな時代だった

オールドスはあざだらけの小さな体で懸命に働いた
殺されたくはなかったからなんでもした
皆のいやがる蛇やネズミの死骸の処理もすすんでした

彼は肌が白く美しい顔立ちをしていた
女奴隷を犯すことに飽き飽きしたミリウスが彼に目をつけた

深夜に館に呼び出されてから以降
過酷な労働はへったが

吐き気をもよおす夜の相手になることに従わざるをえなかった
そんな日々が15まで続いた

憎悪はしだいに高まりついに極限にまで達した
いつか絶対に殺してやる。彼は復讐を決意した。

16歳のときにチャンスがついにきた
世の中すべてを憎んでいる近所の老婆から毒を仕入れた
ぶどう酒にまぜれば味がかわることなくわずかな量で死にいたる
彼はチャンスをつかかった

大規模な貴族たちの宴会の日
毒入りのぶどう酒をついに貴族たちが飲んだ
ミリウスも飲んだ

30分もしないうちに宴会は狂乱のうたげに変わった
5人もの貴族たちがのた打ち回りながら
苦しみのあまり肌をかきむしり絶命した
ミリウスは目の玉が飛び出したようになってまさに地獄の形相で死んだ
彼は歓喜した

絶対にばれないと思ったがすぐにばれた
毒薬に詳しい口モノスが彼の髪から匂うごくかすかな毒のにおいをかぎわけた
生き残った貴族たちが血相を変えてつめより
その場での残虐な処刑を要求した
彼は犬に食われる寸前だった
だがそうはならなかった

(こやつはわしが処理するわしにまかせてくれ)
老貴族のミスドスがみなに言った
(ちょうどあさっての大会に剣闘士が足りないのだ)
(こやつはとびきり強い剣闘士と戦わせてそのあと犬のえさにすればよい。)
老貴族で大將軍だったミスドスに齒向かうものはいなかった。
彼のいのちは2日だけ伸びた。

訓練したプロの剣闘士にしろうとの子供が勝てるみこみはまったくなかった
だがなぜかしらないが彼は絶望しなかった
彼はミスドスが(これでも食べ)とほうり投げた羽のついたままのガチョウをナイフできざみ食
べた。
これまで自分でも気がつかなかった父親ゆずりの剣闘士の血が彼のなかでざわめいた。
(殺されてもいい、俺も殺してやる)彼は胸の奥でつぶやいた。

2日後、勝負はあっけなかった。

嘲笑し笑いながら切りつけてきた敵の剣からすばやく身をかわすと彼は（ウオー）とおそろしいまでの叫び声をあげながら無茶苦茶に剣を振り回した。（バゴン）というにぶい音がして気がつくとも敵は足元に倒れていた。完全に絶命していた。心臓が飛び出してピクピク動いていた。

一瞬の沈黙のあと（オー）という観客の貴族たちのどよめきが起こった。ミスドスが彼に近づき彼の両手を上にもちあげ（勝者に神と皇帝カリギュラの祝福を）と叫んだ

一瞬のうちに彼は罪人から英雄になった
ミスドスが彼のほおにキスをした

彼は剣闘士養成所に入れられた
奇跡の勝利をおさめた彼は策略に富んだミスドスにとってよい投資に思われた

人と人が真剣で殺しあう剣闘士の大会は当時のローマの貴族階級にとってはもっともスリリングな出し物だった

人気のある剣闘士が出る試合ともなると有名どころの貴族はほとんどが集まったし皇帝カリギュラ自身が来ることすらあった

観劇料以外にも莫大な金額の賭けが行われたから
強い剣士を所有する貴族にとってはぬれてにあわのぼろ儲けが期待できた。

そのため期待のできそうな奴隷の若者がいると彼らはたいてい剣闘士養成施設に入れられた。そのほとんどは数年以内に死んでしまうのだがうまい鳥肉や胡椒のきいた豚のステーキを食べることなどまずありえない奴隷たちの暮らしに比べると、肉やさかながたらふく食べることができワインすら祝儀で飲むことのできる剣闘士の暮らしはそれなりに魅力のあるものだった。

彼らは自分の命を担保にほんの2、3年の短い歳月を飲み食らい、安い娼婦を抱きそして死んでゆく若者たちの集団だった。彼もその中のひとりになった。

本気で殺しあうコロセニウムの大会では連続して勝ちつづける者はほとんどいなかった。たとえ勝ってもどこかを負傷していることが多くその怪我が治らないうちに次の試合が来るからほとんどのものが三試合以内に死んだ

ローマはこのころ破竹の勢いで領土を広げていた時代だったから敗戦国から集められた奴隷の少年たちはいくらでもいた。

たとえ100人の剣闘士が1, 2試合で死んでしまってもほんのひとり5戦くらいを勝ち抜ける強いのが現れると貴族たちは元を取れるどころか巨万の富を得ることができた。だから貴族たちは先を争うように剣闘士の養成に熱を入れた。彼の生きていた時代はまさに剣闘士全盛の時代だった。

そうした時代に生を受けたのが彼の宿命だった。

剣士は5試合勝ちつづけると有名な戦士となり観客がたくさん集まるようになる
10戦勝ち続けたものはもはやスーパーでありカリギュラやたちの悪い彼の女たちも試合に来ては大声で声援するようになる。

15戦すべてに勝つともはや伝説の人物となり奴隷身分から開放され自由平民となる。
この20年のあいだにその地位を得たのはわずかに三人だけ。
そのうちのひとりトリトイネスは莫大な富を所有する大商人となり栄華をきわめている。

ほとんど生き残る可能性のない養成所の若者たちにとって
わずかに未来を夢見ることができるとしたらこのトリトイネスのようになることだけである。

しかしほとんどの者はそこまで楽観的ではないから
皆自然に何も考えないようになる
考えると気が狂いそうになるし
剣闘士は奴隷階級の安娼婦たちにモテるのだから彼らはパトロンが気まぐれにくれる貨幣を持つとすぐに娼婦の館に繰り出す。

彼の父と母もそうやって出会い当時人手不足に悩んでいたミリウスに所帯を持つことが許されて彼が生まれた。

しかしこれは非常にまれなケースであり通常剣士が結婚することはないし、すぐに死ぬとわかっている剣士と結婚したがる娘もいない。
彼がこの世に生を受けたのは偶然以外のなにものでもなかった。

その彼も父親のあとを追って剣士になった。
因果の歯車は続いてゆく

明日には互いが殺しあうかもしれない、というより
ほぼ確実にそうなる若者たちに友情は芽生えるだろうか
人は不思議に思うかもしれないが
剣闘士同士には実に深いきずなが結ばれることがよくあった

一日一日が死に向かう、そのためのトレーニングに明け暮れる養成所の一日は
のんびんだらりと生きているものの1年いや10年にもあたるほどの緊張と絶望感に満ちており
そうした常人にはうかがいしれない感情の機微を共有できるのは

やはり同じ剣闘士仲間しかいなかったのだ

剣闘士同士が裸で抱き合いじゃれあう姿はありふれた光景だった
それは普通の同性愛ともまったくちがうなにかだった
たぶん彼らはあとわずかしかない自分のいのちへのいとおしさを
そおいう形でしか表現できなかったのだろう

男同士で心中するものすらいだが
何人死のうが補充はすぐ来るので誰も気にしなかった
彼らの友情は墓場の上で手をつなぎ踊り狂いキスをするそんな友情だった

トレーニング法はひどく荒削りである
同じ戦いの世界とはいえ
貴族の息子たちが名誉のために戦うレスリングとちがって
剣士たちは確実に死ぬ身だから
永続的な能力をつける必要など何もない

貴族の息子たちは手足に重い銅の輪をはめ長い時間を走ったり蹴ったりして筋肉をきたえたが
剣士たちはそんな地道なことはいっさいしない

真剣を使わずに小船のオールほどもあるでかい木剣を使うだけで
デスマッチの試合のまねごとに明け暮れる
打ち所が悪く相手が死んでしまってもとがめられることはいっさいないし
ただ逃げただ木剣を振り回す
その一瞬の本能にすべてがかかっている
その本能的な勘をやしなうのが訓練のすべてといってもよい

勘が発達してくるとたとえ睡眠中ですら無意識の防御ができるようになり
夜中にどこからか近づいてくるヘビを眠ったまま切り殺したりできるようになるものもいる
そんな世界である

だが彼はほかの剣士たちとは少しちがっていた
彼はそれがたとえどれだけわずかな可能性であっても15戦すべてに勝ち抜き自由市民となり
彼をそして仲間たちをこのような残酷な立場に置いた貴族たちになんとしても復讐したかった

だから彼は貴族の息子たちがするように銅の輪をはめ筋肉を鍛えた
教官にたのみ文字のイロハを書いた教科書も手に入れた
彼は自由市民となったあとの自分を強く空想した

大金をかせぎ貴族の仲間となり油断させ
最後に全員を切り殺す
必要なら加ギョ自身をもやっけてやる

もしも最終的に悪いのが神だというのなら
俺は必ずローマの神を切り殺してやる
それが俺の生まれてきた意味なのだ


彼は物静かな女性的な外観とほうらはらに恐るべき強い意志をもっていた
彼は幾重にも幾重にも縛られた運命の輪を歯でくいちぎろうとした

筋肉をつけることは彼にとって運命への挑戦だった
筋肉をつけることで彼は己のころにも強力な武器をえようとした
半年後女性的だった彼の外観はとほうもなく変化した
オルドスはやる気だ 奴は強い
教官も仲間たちもオルドスには一目置くようになった


そして2年間の養成所生活は終わりを上げついにプロの戦士としての最初の試合が近づいてきた

いいね!した人 | コメント(0)

コメントする

 OneNote でクリップ

 で紹介

 チェック

ツイート